

優秀賞

コップ一杯の水

香川県 木太中学校 一年

戸田 楽

僕のひいおばあちゃん、光子ばあばは、御年 103 才だ。品が良く、ボケてもいないし、耳も聞こえているので、僕とゆっくりだけれど会話もできる。特別養護老人ホームに暮らす光子ばあばは、新型コロナの影響でなかなか面会ができないが、リモートで電話をすると、肌がツヤツヤとして頬がピンク色で血色も良く、元気そうな光子ばあばの顔を見ると、ホッと安心する。

僕が小学 4 年生のころ、図書館を使って調べるコンクールがあり、戦争について調べていた。大正生まれの光子ばあばに、戦争の実体験を聞きにいったときのことだった。僕の母と祖母と、親子 4 代が光子ばあばが暮らす老人ホームに集まった。

「夏休みの宿題で戦争の話聞かせてほしいんだけど、光子ばあばは、戦争でどういう思いをした…？」

「うん。」と深くうなずいた光子ばあばは、うつむいたまま言葉を選びながら、ゆっくりと話し始めた。

「ばあちゃんは、じいちゃんと満州に行っとな……。日本に帰れる船の中、食べもんも無かって、お水しか無かったんじゃ……。そのとき、隣で苦しそうに横になつとる若い女の人がおって……。」

言葉を詰まらせる光子ばあばの顔を見ると、うつむきながら目から涙がこぼれていた。

「ばあちゃんも、船の中ではコップ一杯の水しか無かったんじゃけど……。その苦しそうな女の人が、『その水を私にくれませんか……』ってか細い声で言ってきた。そのときは、ばあちゃんもお腹に赤ちゃんがおったから、お水は飲みたかったけれど、そのお水をその女の人に差し上げたんじゃ……。でもその人は、船の上で亡くなったんじゃ……。」

声を震わせながら語る光子ばあばの話を、初めて聞いた僕のおばあちゃんも、お母さんも、ぽろぽろと涙を流していた。

生きるか死ぬかわからないほどの不安の中で、自分だったらそのコップ一杯のお水を差し上げることができるだろうか。きっとできなかつただろう。

戦争の話聞いて、光子ばあばを泣かせてしまったことに、申し訳ない気持ちでいっぱいになった。けれど、光子ばあばの他人への究極の優しさを知ることができた。光子ばあばが心の奥底にしまっていた悲しい話は、心の中だけで終わってしまわず、僕たち全員に、どんな状況でも人を思いやる気持ちを大切にしていきたいと思わせてくれた。

103 才という長生きをしている光子ばあばが、これまで元気にこられたのは、知らない人へもコップ一杯のお水を差し出すことができる優しさから、その亡くなってしまった女性の分の命もつながっているからだと思う。

そんな光子ばあばのひ孫であることを、僕は誇りに思う。